原著論文

物語を用いた多元的価値構造の測定法 - 「よい社会」のイメージの個別分析 - †

竹内 潤子 *1・井出野 尚 *1・玉利 祐樹 *1・今関 仁智 *1・竹村 和久 *2

本論文では、個人が持っている物語の背景にある多元的な価値構造を可視化し、定量的に分析するための半構造化面接の手法として、コルクボード・イメージ・マッピング法を提案する。提案手法の手続きは1) 物語からの主要項目の抽出、2) コルクボードへの布置（コルクボード・マップ）とその解釈、3) 多次元尺度構成法（MDS）を用いたイメージ・マップ（MDSマップ）の作成とその解釈、4) 両マップの比較検討、によって構成される。また、作成された両マップの解釈は、各実験参加者自身への面接で行わせる。提案手法を用いた実験の結果、各実験参加者の物語から価値を抽出できることが確認され、提案手法の有効性が示された。また、軸や布置の解釈から、価値構造を定量的に探索可能であること、また、コルクボード・マップとMDSマップの比較により、個人ごとの布置方略の定量的な判別が可能であることが示唆された。本研究の提案手法を用いることによって、物語の背景にある価値構造の特徴を記述することが可能であり、社会における議論の共通基盤や論点の差異を明らかにできる可能性が示された。

キーワード：物語，多元価値，イメージ，マッピング，よい社会

1. はじめに

本研究では、個人ごとに構成された物語から価値構造を定量的に分析する手法として、コルクボード・イメージ・マッピングを提案する。コルクボード・イメージ・マッピングは多元的価値を構成する事象を各実験参加者が挙げ、それらをコルクボード上に自由に布置することで、その人の持つ価値構造を可視化するための手法である。自分自身で布置させることによって、価値構造の空間的意味を保持できるという利点がある。イメージの構造を測定する手法の先行研究としてPAC分析[1]を参考に、既存の手法の結果との比較によって、コルクボード・イメージ・マッピングの分析の結果の妥当性を担保するとともに、両手法の特徴を生かして相補的に利用する。

また、提案手法の適用例として、個人ごとの「よい社会」のイメージを測定した。多元的価値を持つ問題として「よい社会」のイメージを採用した理由は、社会における立場の違いから、「よい社会」に対する価値構造には大きな個人差があり、そのため個人ごとの価値

構造がよりよく反映されると予測されるためである。人々がどのような社会を望ましいと考えているか、その価値構造を求めることは、社会構築や制度設計を考える上でも重要であると考えられる。コルクボードを用いた価値構造の測定は初めての試みであるため、予備調査を行い、質問紙法で「よい社会」に関する項目を収集し、適用例によって見られる項目と対比させる。

2. 物語の定義と多元的価値測定法の概略

物語の定義は、研究領域によって表現が異なり、必ずしもその定義は一意に定まっていない。例えば文芸批評の領域においてはEco[2]によって「動作主、当初の状態、時間的に方向づけられ、原因によって生じ、最終結果にいたる一連の変化を、特定すること」と定義されている。また、近年心理学の領域においてはやまだ[3]によって「2つ以上の出来事(events)をむすびつけて筋立てる行為(emplotting)」と定義がなされている。これらの定義に共通する点は、複数の事象を結びつけたものを物語と呼んでいる点である。これらの定義の観点から見れば、日々交わされている社会に対する様々な意見・議論は、複数の事象を結びつけて論じられていることがほとんどであり、物語と位置づけることが可能である。たとえば、今日の日本では長引く不況といった経済状況と東日本大震災からの復興を見据え、「国債を発行すれば、すぐに被災者を救援することができるので、国債を発行すべきだ」、あるいは「国債を発行すれば、将来の負担を増大させ、不況

† Method of Measuring Pluralistic Value Structure Using Story: An Individual Analysis About Images of a "Good Society"
Junko TAKEUCHI, Takashi IDENO, Yuki TAMARI, Masatoshi IMASEKI and Kazuhisa TAKEMURA

*1 早稲田大学大学院文学研究科
Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

*2 早稲田大学文学術院心理学教室
Department of Psychology, Waseda University

コルクボード・マップと既存の統計解析手法との比較のため、多次元尺度構成法(MDS)を行ってマップを作り、クラスター分析と併せて解釈を行う。MDSによって得られる項目の布置を、コルクボード・マップと対比して、以降では「MDSマップ」と呼ぶ。まず、主要項目として挙げた項目同士の類似度を、一対比較により評定してもらう。評定尺度は「非常に似ている(1)」から「非常に似ていない(7)」の7件法である。また、それぞれの項目を比較して重要だと思う順位を記入してもらう。次に、各項目について、類似度評定をもとに、重要順位に並び替えて、ユークリッド距離を用いたALSCALモデルのMDS、及びユークリッド距離を用いたWard法によるクラスター分析を行う。

MDSマップとクラスター分析の結果を実験参加者本人に見せ、クラスター構造のイメージについて報告するよう求め、MDSマップの布置及び軸の解釈に用いる。実験参加者に行ってもらった解釈は、(a)クラスター分析のまとまりについて、なぜその項目がまとまったと感じるか、(b)各まとまりの組み合わせで似ているところ、違うところは何か、(c)各項目内容から浮かぶイメージは何か、の4点である。

以上の、(2)と(3)で得られる二つのマップと解釈を比較検討することにより、(1)で得られる、各実験参加者の持つ物語の背後に存在する価値の構造を探索することが、本手法の目的である。

尚、イメージの構造を明らかにする手法を開発するにあたり、主要項目の抽出及びクラスター分析の実施とその解釈についてはPAC分析[1]を参考にした。

コルクボード・マップの解釈においては、コルクボードの布置の際に何らかの類似性の高い項目が近接して置かれると考えられるため、複数の項目をまとめて、そのイメージについて報告するよう教示する。また、MDSマップの解釈においては、クラスター分析は類似度距離行列を元に項目のグルーピングを行う分析であるため、結果の出力であるデンドログラムに示されたクラスターについて報告するよう教示する。これらにより得られた項目の集合を以降では「まとまり」と呼ぶ。

3.2 2データの分析方法

1) コルクボード・マップの傾向の分析

コルクボード・マップに関して、コルクボードの中心から各ピンを刺した位置までの距離 r と中心から真横に引いた線からの角度 θ (ただし、 $-180^\circ < \theta \leq 180^\circ$)を求め、 $(x, y) = (r \cos \theta, r \sin \theta)$ としたときの座標を求めて分析に使用する。

また、コルクボード・マップの解釈をもとに、まとまりを命名した後に、予備調査によって予め定めた価値のカテゴリに分類し、各カテゴリがコルクボード上に出現した位置を記録する。これは、まとまり名と布置には個人差が大きく、布置の傾向を要約的に分析することが必要であると考えたためである。コルクボード上の位置の記録にあたっては、コルクボード内の相対的な位置を 3×3 の9ブロックに分割し、どのブロックに各カテゴリが出現するかを調べる。ブロックを区切る際の基準について、心理学を専攻する大学生と大学院生3名で討議を繰り返し、全員一致した段階でブロックの区切りを定める。さらに、軸について報告した実験参加者に関しては、その内容をふまえて考察する。以上のように、各実験参加者のコルクボードへの項目の配置の傾向から、価値構造を個別に求める。

2) MDSマップの傾向の分析

MDSマップの解釈をもとに、まとまりを命名した後にカテゴリに分類する。また、各実験参加者が用いていたMDS上の軸を推定し、カテゴリに分類する。MDSは二次元平面へのプロットとして結果が算出されるため、軸は2軸推定する。以上のように、各実験参加者の類似度評定による項目の分類から、価値構造を個別に求める。

3) 二つのマップの比較

正準相関分析を用いて、コルクボード・マップとMDSマップの結果を相補的に分析・考察する。具体的には、

$$c_i = w_1 x_1 + w_2 x_2 \quad (1)$$

$$m_i = w_3 x_3 + w_4 x_4 \quad (2)$$

としたときの合成変量 c_i 、 m_i の相関係数 ρ_i が最も高くなるときの w_k ($k=1, 2, 3, 4$)を求め、またそのときの ρ_i を求める。ただし、 $i=1, 2$ であり ρ_i を第 i 正準相関係数、 c_i 、 m_i を第 i 正準変量、そのときの重み係数 w_k を第 i 正準係数とする。また、 x_1 は各項目のコルクボード・マップ上の x 座標、 x_2 は各項目のコルクボード・マップ上の y 座標、 x_3 は各項目のMDSマップ上の x 座標、 x_4 は各項目のMDSマップ上の y 座標である。このとき、布置の一致度を正準相関係数 ρ_i として算出する。

コルクボード・マップとMDSマップとの間で布置が一致しているということは、コルクボード上に布置する際に類似度を元にして布置を行っている可能性が高く、軸についての考察の際にコルクボード・マップにおける軸とMDSマップ上の軸の関連が強いことを考慮すべきである。相関が低い場合には異なった軸を用いている可能性が高いので、解釈の際に留意する必要があることが示される。

4. 提案手法の適用例

本章では、提案方法の適用例として、個人ごとの「よい社会」のイメージを測定した結果について述べる。また、個別に得られたデータを解釈していく上で、共通の基盤を用いることで解釈を容易にできると考え、予備調査を行った。各人のマップにみられるまとまりの解釈を統合的に理解するため、多くの人がよい社会に対してどのような項目を挙げるか、質問紙法によって検討した。

4.1 目的と方法

個人ごとの「よい社会」の価値構造を、提案した方法で分析することを目的とする。実験参加者は大学生12名(男性6名、女性6名)であり、平均年齢は20.41歳(SD=1.32)であった。予め質問紙に回答してもらい、1週間から2週間に以内に個別に実験室に呼んでインタビューを行った。実験全体の所要時間は、約1時間であった。

4.2 予備調査

「よい社会」に対して抱かれているイメージにはどのような価値が含まれているのかを探索的に検討するために、大学生188名に「よい社会とはどのようなものであるか」を自由記述で回答を求めた。その結果、1378個の記述を得た。次に心理学を専攻する大学院生1名と大学生2名でKJ法[5]を行い、合議によって基準を決定し、29のカテゴリ(i.e. 安全、共生、社会保障など)に分類した。また、29のカテゴリに含まれなかった項目内容を「その他」に分類した。これらのカテゴリを、まとまりの分類に用いた。見出されたカテゴリとその出現回数を表1に示す。

表1 予備調査におけるカテゴリと出現回数

カテゴリ	出現回数	カテゴリ	出現回数	カテゴリ	出現回数
安全	145	インフラ	47	将来性	27
共生	123	自由	46	地域活性	26
社会保障	82	明るさ	45	物質的豊かさ	23
政治	81	労働環境	44	公衆衛生	13
平等	75	幸福	43	伝統文化	12
協調性	64	経済	41	ゆとり	11
道徳性	63	子ども	41	国際関係	7
達成	55	権利	41	主体性	6
自然環境	50	教育	38	中庸	4
人間関係	49	平和	35	その他	41
		合計			1378

4.3 結果と考察

4.3.1 項目例

提案手法の手続き(1)の結果の例として、実験参加者B(20歳女性)が報告した項目を示す。数字は想起順序である。

- ①誰もボイ捨てしない社会。
- ②夜に女性が一人で歩いても怖くない社会。明るく、隠れるところがない。
- ③外からも中の様子がよくわかる、開かれた公園がたくさんある社会。
- ④能力に見合う職業とそれに見合う給料がきちんと支給される社会。
- ⑤マナーのよい社会。外を歩いても嫌な思いをすることがない。
- ⑥隣近所とのつきあいがある社会。
- ⑦家族間のつながりが強い社会。両親が子どもと触れ合う時間をたっぷりとれるような社会。
- ⑧散歩したくなる街並みがよくある社会。
- ⑨毎日の生活に不安がない生活。環境、お金などすべての点で。
- ⑩人々が、この国に生まれてしあわせだと思えるような社会。

4.3.2 コルクボード・マップの分析

まとまりの一人当たり平均出現個数は3.33個(SD=1.03)であった。実験参加者Bが報告したまとまりと分類されたカテゴリ、及びコルクボード・マップ上の軸の意味を、図2に示した。数字は想起順序である。以下において、出現頻度の高かったまとまり、コルクボード内の上下左右の位置の持つ意味、及び解釈された軸について考察を行う。

図2 実験参加者Bのコルクボード・マップの分析結果

表2 コルクボード・マップにおけるままとりの出現回数

カテゴリ	出現回数	カテゴリ	出現回数
子ども	4	ゆとり	2
安全	3	地域活性	1
共生	3	道徳性	1
社会保障	3	経済	1
政治	3	物質的豊かさ	1
協調性	3	国際関係	1
幸福	3	達成	1
自由	3	インフラ	1
将来性	2	その他	9
		合計	45

図3 主要な布置の位置

4.3.2.1 まとまり

ままとりの各カテゴリの出現頻度を表2に示した。ままとりは、「子ども」に関するものが最も多く、次いで「安全」「共生」「社会保障」「政治」「協調性」「幸福」「自由」に関するものが多かった。「安全」「共生」「社会保障」「政治」「協調性」については、予備調査でも出現回数が上位であり、多くの人が共通に「よい社会」として必要な事柄として捉えている可能性があることが示された。「子ども」「幸福」「自由」については比較的幅広い概念であることから、ままとりを考える上で出現しやすかったと考えられる。また、予備調査では出現頻度が上位でなかった「子ども」が最も多く出現していたことに関して、「子育てに不安がない(実験参加者A)」「子育てがしやすい社会(実験参加者C)」といった子育てに関する内容と、「出生率が高い(実験参加者E)」「少子化でないこと(実験参加者J)」といった少子化に関する内容が「子ども」のままとりに含まれており、他の項目は直接的には子どもに関わるものではなかったことから、子育てや少子化の問題に、その他の項目内容が関連づけやすい可能性が指摘できる。このことは、「子ども」に関する内容が「よい社会」を考える上で、重要であることを示唆している。

4.3.2.2 布置の意味

ままとりのカテゴリが布置されていた位置として主要であったものを図3に示した。カテゴリの出現位置については、2名以上が同一の位置に布置していたものを主要な布置として定義した。

4.3.2.3 軸

縦軸について語った実験参加者は5名であった。「重要度」「抽象度」を用いた実験参加者が2名ずつお

り、1名は「複雑さ」を用いていた。それぞれ、上の方ほど重要度・抽象度・複雑さが高くなるように置いていた。また、横軸について語った実験参加者は2名で、いずれも時間について語っていた。1名は左に短期的なもの、右に長期的なものを置き、1名は左に現在に関するもの、右に将来に関するものを置いていた。また、中心に重要度の高いものを置いたと語った実験参加者が5名おり、それぞれ、外側に行くほど重要でないもの、中心のものと関係性の高いもの、中心のものにとって必要なものを置いたと語っていたため、中心から外側に向かう軸が存在する可能性が示された。

4.3.3 MDSマップの分析

ままとりの一人当たり平均出現個数は3.08個(SD=0.51)であった。実験参加者BのMDSの結果、命名されたままとり名と分類されたカテゴリ、及び推定された軸を図4に示した。数字は想起順序である。以下において、出現頻度の高かったままとり及び軸について考察を行う。

図4 実験参加者BのMDSマップの分析結果

表3 MDSマップにおけるまとまりの出現回数

カテゴリ	出現回数	カテゴリ	出現回数
安全	3	地域活性	2
共生	3	道徳性	2
社会保障	3	人間関係	2
政治	3	経済	1
将来性	3	物質的豊かさ	1
平等	3	明るさ	1
協調性	2	自然環境	1
幸福	2	その他	3
自由	2		
合計			37

表4 コルクボード・マップとMDSマップの一致度

実験参加者	第1正準相関係数	第2正準相関係数
A	0.712	0.059
B	0.820	0.415
C	0.535	0.187
D	0.502	0.113
E	0.628	0.239
F	0.906 *	0.517
G	0.458	0.008
H	0.885 *	0.323
I	0.722	0.334
J	0.844 *	0.640
K	0.738	0.016
L	0.932 *	0.100

* $p<.05$

4.3.3.1 まとまり

まとまりの各カテゴリの出現頻度を表3に示した。

MDSマップにおけるまとまりは、「安全」「共生」「社会保障」「政治」「将来性」「平等」に関するものが最も多かった。「平等」を除くこれらのカテゴリは、コルクボード・マップの解釈で出現頻度の高かったカテゴリと一致している。「平等」については、コルクボード・マップでは出現しなかったまとまりであるが、予備調査においては「安全」「共生」「社会保障」「政治」に続き出現回数が5位のカテゴリであった。このことから、MDSマップの解釈を用いることで、質問紙調査で得られるイメージの主要なカテゴリを少数の実験参加者の回答から明らかにできる可能性が示された。

4.3.3.2 軸

各実験参加者のMDSマップの結果について、縦軸と横軸の解釈を行ったところ、「制度－非制度」の軸が7名、「個人－社会」の軸が5名、「時間」の軸が3名、「受容・均一化」「金銭」の軸が2名から、それぞれ得られた。

4.3.4 二つのマップの比較

上述した正準相関分析により、コルクボード・マップとMDSマップの二つのマップの布置の一致度を算出した。各実験参加者の正準相関係数 ρ_i は表4の通りであった。 χ^2 検定を行ったところ、相関があったのは4名であった。 c_1 を横軸、 m_1 を縦軸にとって、最も相関の高かった実験参加者Lと最も相関の低かった実験参加者Gの正準変量をプロットしたものが、図5及び図6である。

実験参加者Lはコルクボード・マップの解釈の中で、布置の方略について、「意味が近いものを近くに

図5 実験参加者Lの正準相関変量のプロット

図6 実験参加者Gの正準相関変量のプロット

置いた。」と述べており、類似度に基づいて布置を行っていたことが伺える。そのため、正準相関係数が高くなったと考えられる。

また、実験参加者Gはコルクボード・マップの解釈において、「自分の中で順位をつけ、上から順に並べた。同順位の場合は並列した。」と述べていたことから、類似度以外の基準で布置を行ったため正準相関係数が低くなったと考えられる。

以上のように、コルクボード上に布置する際に類似度以外の基準を持って布置している人と類似度をもとに布置している人がおり、正準相関分析を用いて類型化が可能になる可能性が示された。

さらに、二つのマップに対する解釈の分析から、「よい社会」のイメージは「子ども」「安全」「共生」「社会保障」「政治」「協調性」「幸福」「自由」「平等性」「将来性」に関する面が整っている社会であることが示された。また、人が「よい社会」について判断する際の基準として、重要度や抽象度、時間的側面、制度に関するものかどうか、個人的か社会的か、といった内容が用いられている可能性が示唆された。特に、人のもつ「よい社会」のイメージの中で重要度の高いものや抽象的なものは上の方にあり、重要度が低いものや具体的なものは下の方にあるかもしれない。同様に、短期的なものや現在に関するものはイメージの空間において左側に、長期的なものや将来に関するものは右側にある可能性がある。また、重要な価値が中心にあり、その周りに重要度の低い価値が同心円状にある人もいることが示唆された。

5. 結論

本研究の目的は、個人が持っている物語の背景にある多面的な価値構造を可視化し、定量的に分析するための半構造化面接の手法として、コルクボード・イメージ・マッピング法を提案することであった。本研究によって、「よい社会」にとって重要であると考えられる価値と、「よい社会」を判断する際に用いられていると考えられる軸が見出され、そうした価値や軸の価値空間における意味が示唆された。本提案手法は、物語に包含される価値の構成要素や、重要度の上位下位といった意味構造の明確化を可能にすると考えられる。

提案手法の適用例として、個人ごとの「よい社会」のイメージの測定を行い、それぞれの実験参加者の物語から価値を抽出できることが確認された。また、価値判断の軸や価値構造を定量的に探索できることが示された。さらに、コルクボード・マップとMDSマップの比較により、個人ごとの布置方略の定量的な判別の可能性が示された。これらから、提案した手法の有効性が示唆された。以降では本研究で明らかになった提案手法の性質について考察する。

コルクボード・マップには、項目が布置された空間の意味を保持することができるという利点が見られた。また、その空間の意味には一部重複が見られ、価値構造の類型化が可能であることが示唆された。質的分析の手法として広く用いられている手法にKJ法が

あり、整理されていない情報の中からボトムアップ的に新たな概念やカテゴリを形成できる[6]という利点があるが、価値構造の空間の意味を測定することはできない。さらに、本研究においてはMDSと本提案手法を比較したが、MDSは相対的な位置関係を示す手法であり、マップの上下左右には意味を持たない。本提案手法は自分で直接布置を設定できることにより空間の意味を保持できると言う点で有用であると考えられる。本研究においてはコルクボード・イメージ・マッピングにおける軸の導出も実験参加者自身に行わせたが、この回答にも複数の実験参加者の間で共通したものがあり、人の持つイメージの構造を調べる上で重要な要素である判断の軸を明らかにするために、コルクボード・イメージ・マッピングが利用可能と考えられる。

また、MDSマップの解釈には予備調査の結果との一致が見られ、多くの人に共通な価値を抽出可能であることが示された。

本手法はコルクボード・イメージ・マッピングと既存の統計解析を用いた分析の二つの下位手法を併用して行ったが、両手法の結果は一致する部分もあるものの、実験参加者の両者に対する解釈は部分的に異なっていた。そのため、両手法を併せて用いることによって、より複合的で多角的な価値構造の探索をできるようになることが示唆された。また、正準相関分析により、コルクボード・マップにおける布置に関して、類似度を基準として布置しているか、他の基準をもとに布置しているかという方略の判別に、MDSマップを用いることができることが示唆された。さらに、実験参加者の内観を取ったところ、自分では意識していなかったイメージの構造に気付くことが出来たとの報告が多く見られた。実験参加者が潜在的に持っている価値構造を、コルクボード・マップとMDSマップという客観的なデータとして、実験参加者自身にフィードバックしたため、実験参加者が自らのイメージに対して客観的な視点を持つことができたと考えられる。このことから、提案手法を用いることで価値構造をより正確に把握すると同時に、価値構造について実験参加者自身に内省を促す作用が期待できることが示された。

最後に、本提案手法と物語との関連について考察を行う。本研究では「物語」を複数の事象が何らかの意図をもって筋立てられたものと定義した。本提案手法によって、物語の複数要素を可視化することができる。本提案手法を用いることで、どのような主題が根底にあるのかを示すことが可能であり、また、物語の背後にある価値観を明らかにすることができる。一方、筋立てには、要素の記述順序の問題が存在する。今回の

提案手法では、項目の呈示順序を分析対象としなかったが、項目の呈示順序にも重要な情報が含まれている可能性が存在する。そのため、項目の呈示順序を含めた分析を考案することを今後の課題としたい。

本研究の提案手法を用いることによって、物語の背景にある価値構造の特徴を記述することが可能になり、社会における議論の共通基盤や論点の差異を明らかにできる可能性が示された。また、予備調査との比較検討により、各個人のもつ価値観の位置付けを行うことができる可能性がある。コルクボードへの布置に際しては個人ごとに差異が顕著であったため、価値構造の特徴の類型化が可能であると推察され、パターンの抽出に関して、今後さらに検討していく必要がある。

謝辞

本研究にあたっては、PAC分析の開発者である信州大学の内藤哲雄先生にご指導を賜りました。ここに深謝の意を表します。また、明星大学の林幹也先生、早稲田大学の尾関美喜先生、早稲田大学竹村研究室の皆様にもご指導をいただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- [1] 内藤哲雄 (2002). PAC 分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待 [改訂版] ナカニシヤ出版
- [2] Eco, U. (1979). *Lector in fabula*. Milano: Gruppo Editoriale Fabbri.
(U. エーコ (2003). 篠原資明 (訳) 物語における読者 (新装版) 青土社)
- [3] やまだようこ (2000). 展望 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?— 教育心理学年報, **39**, 46-161.
- [4] Koch, C. (1952). *The Tree Test: the Tree-Drawing Test as an aid in Psychodiagnosis*. Bern, H. H.
(C. コッホ (1970). 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) バウム・テスト—樹木画による人格診断法— 日本文化科学社)
- [5] 川喜田二郎 (1996). KJ法—渾沌をして語らしめる 中央公論社
- [6] 菊田知則 (2004). なぜ子どもは「隠れる」のか?: 幼稚園における自由遊びの参与観察 発達心理学研究, **15**, 140-149.

(2012年8月14日 受付)

(2012年9月20日 採録)

[問い合わせ先]

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学学術院(心理学教室)

竹村 和久

TEL: 03-5286-5349

FAX: 03-3203-7718

E-mail: kazupsy@waseda.jp

著者紹介

たけうち じゅんこ
竹内 潤子 [非会員]

早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻心理学コース 修士課程在籍中、日本心理学会会員、専門分野：社会心理学、意思決定論。

いで の たかし
井出野 尚 [非会員]

2007年早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程単位取得退学。現在早稲田大学文学研究科科目等履修生。また、早稲田大学、立教大学、明星大学、高崎経済大学、国立音楽大学などで非常勤講師。意思決定、神経経済学、リスク認知、ストループ効果などを題材に、潜在的な認知プロセスを検討中、日本心理学会、日本感性工学会などの会員。

たま り ゆう き
玉利 祐樹 [非会員]

早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻心理学コース 博士後期課程在籍中。日本感性工学会、日本心理学会、日本行動計量学会、日本消費者行動研究学会会員、専門分野：社会心理学、意思決定論、消費者心理学。

いませ き まさとし
今関 仁智 [非会員]

早稲田大学文学研究科科目等履修生。2013年4月早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻心理学コース 博士後期課程入学予定。駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻 修士課程修了。日本心理学会、日本行動分析学会、メンタルケア学会会員、専門分野：選択行動、意思決定論。

たけむら かずひこ
竹村 和久 [正会員]

早稲田大学文学学術院教授、早稲田大学意思決定研究所所長、早稲田大学理工総研兼任研究員。1994年、東京工業大学より博士(学術)。筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授、フルブライト上級研究員などを経て現職。専門は、意思決定論、社会心理学、経済心理学。著書は「行動意思決定論ー経済行動の心理学」(日本評論社)、「意思決定の心理ーその過程を探索する」(福村出版)、「Soft computing and human centered machines(共著)」(Springer Verlag)、「Decision making: Social and creative dimensions(共著)」(Kluwer Academic)など。

Method of Measuring Pluralistic Value Structure Using Story: An Individual Analysis About Images of a “Good Society”

by

**Junko TAKEUCHI, Takashi IDENO, Yuki TAMARI, Masatoshi IMASEKI
and Kazuhisa TAKEMURA**

Abstract :

We propose a new method of semi-structured interview, called “Corkboard Image Mapping,” to visualize pluralistic values behind the stories of individuals and to quantitatively analyze them. The proposed procedure was as follows: 1) extracting main items from stories, 2) mapping to corkboard (Corkboard map) and interpreting it, 3) making an image map based on Multi Dimensional Scaling (MDS map) and interpreting it, 4) comparing the Corkboard map with the MDS map. Interpretation of the maps was made by the interview with each participant. The result of experiment using the proposed method indicated that values were extracted from each stories. It was also suggested that interpretation of axes and mapping enables quantitative analysis of value structure and that comparison between a Corkboard map and a MDS map make it possible to quantitatively discriminate individual mapping strategy. This study demonstrated that common base or dissonance of discussion in a society could be explored, using the proposed method and describing the features of value structures behind stories.

Keywords : story, pluralistic value, images, mapping, good society

Contact Address : **Kazuhisa TAKEMURA**

Department of Psychology, Waseda University

1-24-1, Toyama, Shinjuku-ku, Tokyo, 162-8644, JAPAN

TEL : 03-5286-3549

FAX : 03-3203-7718

E-mail : kazupsy@waseda.jp